

本科 12月18日(木)

第52・53回講座 「地形・地質学入門」

講師 岡崎 浩子氏(千葉県立中央博物館 地学研究科長)

日時 12月18日(木) 10:00~15:00

場所 県立中央博物館 講堂・展示室

テーマは、千葉の自然景観をつくる地形と地質

身近な千葉の丘陵や台地、低地の成り立ちについて学ぶ「地形・地質学入門」の講座が、県立中央博物館に準備室の時から勤務される岡崎浩子講師により行われた。

はじめに千葉県の地形・地質の概要では、南半分の標高100m以上の房総丘陵は比較的古い地層で、北半分の標高100mより低い下総台地や低地は比較的新しい地層からできていることが地質図等で紹介され、房総半島は周囲の北米プレートの下にフィリピン海プレートと太平洋プレートが沈みこむ運動と地球規模の海水準変動が要因で形成されてきたことが説明された。そして日本のジオパークに認定された銚子犬吠埼や屏風ヶ浦などが紹介され、「千葉の自然景観をつくる地形、地質を見に行きましょう。」との岡崎講師の呼びかけで午前中の講義は終了した。

午後は博物館の収蔵庫を案内していただき、普段は見ること出来ない博物館の活動の様子を見学した。そして展示室では展示物の解説をしていただき、午前中の講義の内容を確認することが出来た。



千葉県のほとんどが第四紀層(260万年前から)の地層で房総丘陵と下総台地では地質が異なる。



下総台地は古東京湾にたまった地層で10万年周期の海水準の変化で陸と海の地層が繰り返している。



印旛村で約22万年前の泥層から発掘されたナウマンゾウの標本



平成24年にジオパークに認定された銚子犬吠埼の浅海堆積物



収蔵庫の脇ではボランティアの方によるクジラの化石の標本作りが行われていました。



収蔵庫の中には、牛伏寺断層の剥ぎ取りをはじめ、様々な標本が保存されていました。



展示室では斜交層理地層の剥ぎ取りなどの展示物の解説をしていただきました。



ナウマンゾウの化石の標本の前では、地質調査の苦労話なども聞けました。